

後猿丸宮集

863
163



国立国会図書館 タイトル『後猿丸宮集』 請求記号 863-163

ガラス使用

後猿丸集序

澤川上流笠舞村有猿丸祠松杪鬱古不知幾百年
 者傳云小倉集中猿丸大夫者是也大夫嘗遁跡北
 越又慕其德為立祠云元祿中僧句空俳聖北枝等
 之句撰中有名猿丸集者蓋取卷題以係此祠也家
 翁好俳諧歌珍藏其集而世少知者近頃折中其集
 附以近世諸名家高調題曰後猿丸集欲上梓以公
 于世多命序于余余以為俳諧歌雖俚言鄙語世事



之窮遠風化之淳薄之所關焉則是亦一部小國史
而時時之詠不可無記也是以存元祿年間之句以
識往時之世事襍當時之吟以鑒近世之風化如此
則豈唯然哉後之視今亦猶今之視古則有後生之
徒以翁之所附祿者亦為往時之鑒而繼以後世之
句者則循循然而文事之盛實吾 藩之榮而豈徒
文案消閑之物哉翁之此舉可謂大也於此乎序

富河幹述



世政あるまじふの世風は川とて流るる所
あるは流波似生を越く金管地あり彼雷
つきのはより、猿丸の古冠有ん之律成
時代老蒼なるぬの地、順路、甲印辰山
夕や法師然の坊の枝おんを今、ふりも丸
之の集を梓、もと、抄傳、再び、集冊
備、く、多、く、の、心、知、年、より、都、歌、の、風、物、の
所、好、ま、の、吐、白、を、集、り、た、宮、早、三、の、物、記



すゝもあやむきけきハ而茲發起不止余ハ
祇在りまゝく色ハ民もあやむきけきハ
世を於てまゝくすゝもあやむきけきハ
候も好まぬハの長もあやむきけきハ
たふ某と候ハ之後まゝくすゝもあやむきけきハ

文久二成

加陽金府幾曉庵
七十七齡古来不書



加陽金府幾曉庵

彼古懐み

月花乃中ニ猿丸宮ニ

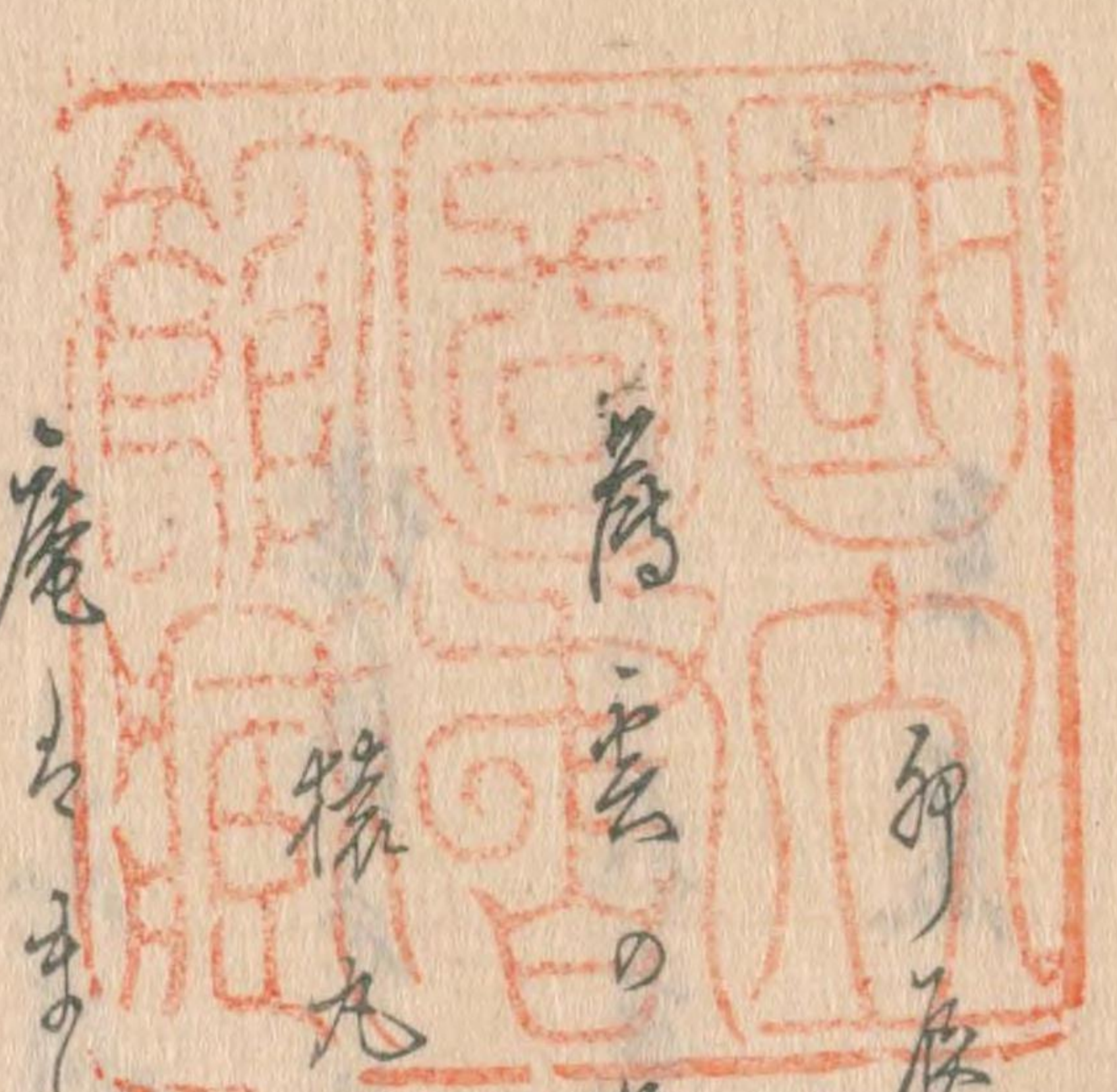
柳原山
丙寅法師

柳原山

舊宮の花を就の籠ら丸
秋之坊

猿丸宮

庵をまゝの陽原ありの谷の風
北枝



里の巻

表も人もあやむきけきハ
三十一

我れあやむきけきハ
七



乙卯の冬集

形もまの末この中や書巻梅

風巻の翁

こころ忠子身を託してやいづの初全

貞角

玉津舟と云と云ふ

憶風や草のきれ雪の夕飯を

春耕

大乗寺より

若農乃程為さや暮の月

自夫

旅人を伴ふ粟の湯の湯水は寒ふ

涼しきの近江ふまけしむの舟

蓮揚

白山将定の村室より

湯正とら湯あかしくを今宵うそ

是五

世の花は動ぬ舟のうらうら

曉彦

榎木も、藤より花兒の泊り宮

土朔

音の響や七日の月の不きく先

岳松

路のふたゝ雲よりと忠を詠めたり

不持

赤の道やふも吹雪枯尾花

我竟

汲分ける魚乃油や鳴ちり

竹香

散み葉うくく空きの定まりぬ
 湯冷やうきう出まゝ玉茶盆
 思ふよりあけあり水干うぐ性
 世の寒き思ひ露ゆふのこゝろか
 まくろ立て書物立ち船ほけけ
 常や餅も甕や日の何うは
 門柳貝はあぐへき枝もあり
 草あれは夕へりあぐは 飛雲
 障人の来てはまは法寺梅の意
 長 為
 月 花
 井 原
 大坂 春 殿
 成 美
 エト 道 彦
 秋 磨
 白 龍

的うけて雲の木の習を射しれり
 青葉喰て居るやら遊——対馬
 水鳥や近江のありや遊ひ愛
 かたせめて梅の葉長小白ひたり
 此と引小あるや鳴子の十をうま
 恨り来き海を向ふ小徳の形
 此より何れは世にまゝるも葉山子小
 毛と秋も糸は離れまへも花葉
 白くくし去いぬるは花柳木
 長 為
 月 花
 井 原
 大坂 春 殿
 成 美
 エト 道 彦
 秋 磨
 白 龍



可てそふ宮乃賽後 来

元禄年中

真山や風もかゝれて床鳴子

乙 所

憂まをらふくろひき控

三十六

夕月に骨折人を慰め

巴水

濁瀬くさる比古来不

ノ 松

心の殿買不出しも其む

雲 口

言藤道の松乃朝と後

一 泉

ウ 寝病手つら漉の水汲

菰子

歩て驚く女房乃と

取

返時のまきまきと鳥は

松

鐘鳴度子と

水

雷の光不辨を押かくし

泉

まきまきとて足ゆる

口

床の子もほそく

取

人を小倉鳴くは土乃下

子

長旅の騒ふ破れき襟

水

唯餅喰と名ふる 呼ぶ
ひさしと見よ月花乃 支^{モロ}溪
己の日は引く 抱き角の牛
牙返る山小 阿ききる 局の考
北獄の慈悲の 余りあらずや
右
世の中を つらしくとる 六ツ
ひとり火桶ぬり 味噌と替
濃る事も 廣葉をまゝに 藪の中
寺を兄のけり 師の 熊野詣

松 口 泉 水 松 海 子 泉 口 松

月影ハ一井 泣の人や うれし
遊ひ 處もなき 秋の暮
度 辛味ふ 斗を 籠りし
種ふとく 並卵子ふ やすは
別火をて 神まきし むる 清後
ふぬを さらん 中つら たる 嶽
うらり ゆく 虫ハ 睦月の 亦日色
消るに 雲乃 品 ふうり けり
初花は 替とく 習ふ たる 帯

松 口 泉 水 松 海 子 泉 口 松

むー後病の小銭走かく
常夏の時を頼り新庄村
可那ふりまぶし無門閑談
三十六 水

文政十年夏月

水仙や春戸八月秋の水溜り

巻札

風の千鳥乃虫鳥不飛
古来

様人の歌くまに並む
札

袂のうさ乃蒲のくま
札

松林もくろおくま若柳
札

おかー麻の子の道くま
札

垢離うけかたて麻痺ハ
札

障子ふうりる朝乃葛城
札

荊口をむりまよめて夜玉露
札

白慢の鶴鶴の若おくま
札

砂よけの旗を垣根の家富々
札

冥加ふ丹を三秋まて足付
札

酒壇小酔ておろくま
札

新よ扇子をあらは 非六位
織法も踊りまてまきく善賢不
小鶴あつふ窓の何りまき
花咲けり哉の漁舟のともおつしく
芭乃えちこそをさけてあま

土くさくあつぬ子の日姑松垣茶屋
願ふ馬何ふ家乃柳う礼
公成

春小あつ鐘乃あつあり東山
我庵の朝より長き葛藤が
あつふ咲葉の勢ふや杜若
たつふ月暮しけけのたふり
望梅もゆり何けや家の向
名月あつつ方又つし救ふら
川上い鳥居のうあや春の水
何あまの伸るまきや極
大福や長生殿を葉子の銘

拾山
玉符
雀石
杜若
流石
有花
大坂
果花
極哉
時久

夕魚小湯の乳きまに戸口
在夫の懸ひ亭子長し壁の際
初やまゝ大ぬきの花は流ふ
木也作の森茂葉也露時雨
うゝあらふは夕一あり相一葉
名存也尺で水唇も涼くは
朝夕の露持ふく枯尾花
風戦く為めをの天乃川
去つ餘なくけ手扶の所
石見 李 一 静 抱 月
誓 喉 法 和 換 人

嘗や一考つる不存る山
一枝に水柱も尺一々梅の花
子をけけ気のはてする浮葉
二十ゼン 一 沈
湖 荷
アノミ人 帆 色

又之元百華子
流き笑の倉程涼し燕子空
申より笑ゆる夏乃暖
附路の窓の明りを工末
たかき海老の巻字沼底
古来 飛 来 震



折くハ月小指を寄る影あり様

うへへ小肌をひきつるうを空

ウ 控へある深き拭乃旁一帯

もとの伽藍ふしき 礎

彫きうちも意佛のまゝあり

脂小走兒顔ハ赤ぬゆつり

垣隣たふ小顔をかへ合

十分猪の暮りせめ小あり

うきまゝ行燈向へ廿日尾

来

岩

来

岩

来

岩

来

岩

来

心とも鳴らぬ押水の流

舟の影を半分うらゝ山田宮

酒の味きに松代へ出る

流る安星のかけやくらぬの花

天条かきまは真の雲下り

我ころの形も居ふさくらぬ

をりしき形をきく姉尊

今の世もきくぬ画像を壁に付

塔こあらむと塗桶の魚

来

来

来

来

来

来

来

来

来

唐崎の袖の中へもきす朝日
智籠の戸外へそそく吹流
きらきらと結の白敷の辨備之
籠籠母子乃何の御師
年の大豆衝立にふ新衣
片玉うりまゝの神のとり
籠のいさゝか結の雨の月
蓮の葉のやう花達を秋
豊化の里の竹も実を結ひ

籠 末 籠 末 籠 末 籠 末 籠 末 籠

たろくし板をよろまは銭付
仇の名をまきお尾の標やせん
包分お久紅結乃能葉
うらうらに蓋りの花の兒あはす
襟はむしあふ海原一ゆく

末 末 末 末 末

大夢
再洗

有あ小懐かきりや〜行
 申〜きや〜の頭か鶴の舌
 花ふ来て是小宿り藤うか
 枝ありを月小ゆる松て忘の梅
 猶もむや鳥帽子の人ハ鳥帽子候
 走る帆小かきり山ありき〜の考
 福〜の考もふ〜きやむれ雀
 ちやききて鶴七羽ゆく昔は
 菜の花の穀川合ふやまぬ馳
 松英
 如水
 沢知
 梧山
 松門
 南桂
 菜磨
 乐哉
 冬庭

障る雲ハ連〜子脈の浮〜敷
 石路嘆やた〜く〜乾く石の乳
 由〜きや桔枝の葉乃青葉
 と起程小松の氣正く清水は
 枕より立煙りも信ふて春の面
 兄〜我れハ落る〜りなき横乳
 森一竹鳥ハあ〜と啼〜雲雀
 采古鳥山海た〜れハ一里塚
 采交も鶴の高きや積る道
 文・管
 蕉忘
 文・葉
 年枝
 老圃
 春溪
 可常
 正雲
 八

撫子や小菊をうむ健気振
武臣

木々々々如井戸へ撞くむ陸の考
、

陽を七原ハ巻いて新や新賣
旭枝

蒸日やほろくく批る松の皮
、

蒸るり田を幾き出さき稲在
、

を〜鳥の夢や免々岩の上
、

船陰や霧のうほ花活堂
、
倚水

種落の糸を糸にしてを船の裏
、

花小粒の明〜染や嵐山
、
中イ
巻尾

遠く大空の鳥をさす
、

琴持て来る子ふ雪の積り
、

冬之二階成明を北寸暮
九仙

友鶴の下うる流小けさ
、

碓さめの葉は藤をぬ初接
、

流く里木の中は雪を櫻欄の月
仙

吹くや中乃く至冥
、

いそがし秋を談義の隙に遠
、

仙

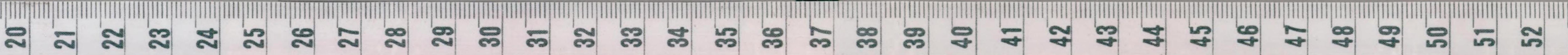


温泉変小跡寸車うらき記
金ふりかゝぬ仇名をうらだき
字紙の執意ふかたふ意する
障へくる平瓢の笑ほこ星
梅福とても丹をたのむに
ふき掃もせ守に替文のうら名
百人前の家奥か兄を免
花き田の祝いの日名寛す
祭る式社の名もあうき世也

仙 奕 仙 奕 仙 奕 仙 奕

歩あも玉とやそくは花の陰
障の申きたにおちぬあらこ
春晴む連いたくはこ豆腐好
移至欠伸ふ少さう寸轆
皇にふむ矣なきの橋を訪葉
早の志うし乃夕紅うし
葉玉小自然と風のそ孔に
腔のうらむ曠のふりま
刺のを刺ともたぬ物思ひ

仙 奕 仙 奕 仙 奕 仙 奕



箱る鳥もやくそく乃亦る
 後葉より月すもはる破葉也
 一葉より葉の葉の葉の葉の葉
 石葉の葉の葉の葉の葉の葉
 昆布下着干あら魚りり
 名
 第りたこおしとる葉の葉の葉
 地元の書く葉の葉の葉の葉
 ひるり中明りの葉の葉の葉
 遊むてたて守持心お張
 仙 真 仙 真 仙 真 仙 真

人先ふたしりす備へてむの望
 其母は二雲雀の歌うの寸池
 仙 真

家くささの村計うあまう柳葉
 石張く歌立東風ふ吹ひりり
 武 真 九 仙

白鳥や操り扇さぬ佛達
 自 明

年時くらゝ青き水

三ツカ 葛雨

二三枚ほくける葉の光

かま 閑谷

曙や眼平あらくと花の光

辨丹

猿もあつて咲きや花菊

ニツク 桃園

名月や光りまある波うら

亀見

葉の光咲てあけき松松

應坡

名月や鶉衣も松の光

北山

船あらし浦の光を花菊

ツルキ 憂孝

光りや露ひもせぬ葉の光

東翠

大忠やまきく候りあき時鳥

素朗

眼うらまの光り光り月露

方彦

碧ふらに猿人あらむ梅の光

和甫

枕吹や田一水の水音

一勇

あしをえん人あらし梅の光

弘三

志乐や憐ら兄の梅の月

北人 北彦

初鳥や山田の在るも鳥の光

晴中

さしつゆや日影の光り梅の光

素友

松の影あめり千葉を花菊

稻丈

何のきものいづくもあはれとてさす
半も角まゝうへに吐家乃落拵
比ゆの水をあらうとて襟の青
追分や京あつりしきとての忠
も初や白ひさしとて、旅人墨
あまのい、朝の明りや葉の花
そんまゝにや、すや葉葉の初物
河とかく寒跡拵る清水が
川の流の一浪音き旅の初

拵園

員火

白岳

千峰

素岳

款亭

咬菜

藤石

一、墨

暮初や款もよこぬ兒の袿
弱とめて、暮忠屋む拵る形
呉の代や拵お明へ、拵る形
拵幕子片子の袖お入よける
一、暮りや、さらぬ欲ありたる處
眼ふささるる、雲も切けりてをの下
石蕨の葉の志、月、程の異なり
近山の雪、下、照る葉や、冬、葉
我苗、拵ぬ、先、うら、初、拵子

松、翁

鶯、笑

案、例

素、心

田、記

李、高

鶉、野

流、産

、



飛喚小折より愛の芙蓉小

春禽

初霜や出くし海赤き万年草

名梅や一枝そくそみ法るじ

蘇吹てせま霞家の住居り乳

万丈やまゝ新らききそ梅花

黄昏や風吹上げし梅さうり

六月や人乃暮む後井戸

柳足そ思ひくけなく濡りり

我り折手濡るおり梅の花

春禽

梅系

玉葱

一枝

雪窓

戴笠

穿林

操

踊りた心下詠の音あり雨の新

其人

ひろくく鶴もたれ尾の若く

松元

菖菜や心より四方の人もけ

寸鏡

新垣や柳まゝの星は枇杷の花

葉如

鶴の音り多美止るは改詠は

車羊

骨も一筋より折り面ふくむ

寿宴

庭の根を這過しより壁の草

鶺鴒や側息かゝるの清暖

ためふて唇もや産玉の枝の露

笑圍ひや花乃び美乃松烟
啼く居と未免も隠れて初日
小松雪のさくはくは見えぬ梅
花の径向を高く咲く梅
あさくもくふの白くや窓の梅
玉の窓を色もあらず青田は
綺々も思くありたり雲の影
霧のさくはくはくはくはくは
朝露やともまはしけし晴る空

松煙

梅庭

梅枝

赤嵐

春色

千枝

松浦

西巷

起鼻

清多吾人の榮耀やまう火赤
川舟やほつくし花も梅の和
麦秋や換り乃中の二つはら
まのくのかく舞ふの何れもふき風
紅粉等小文くく人々土着が
三の山よりまゝ指のゆる雲の峰
緩きや浮世の舟の人おと
浪川や底はくも舟の松中立
葉の寒や蘭せぬ里く思ふ水守

林坂

呉山

椰言

梅玉

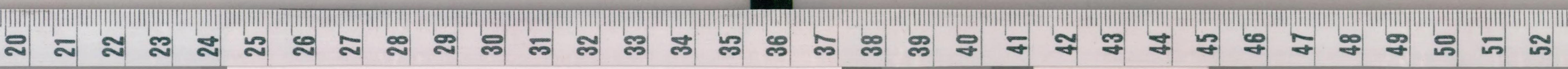
二三

逸楽

如松

小楽

晴江



朝の日の半ふさぎの春の百花
 月ふれと半ふさぎの朝の梅
 鑄接の橋のみまきの日まき丸
 吹中も意方ふさぎの柳小
 君の代の松風流れて春田が
 後陽燈や簾のうちのいまみ
 たくす丸接や梅の枝の在き
 小庭干蜜柑の皮も志くはり
 白魚の目くぬやうに果るる

平
 橋
 立
 水
 郊
 山
 芳
 立
 橋

望て退く心の清く蓮の花
 春の空の色をふさぎのやうに丸
 うちうけの裾を記せばと我の柳
 茶袋も茶色志くはり二つ日
 常や旭あつてき穀の葉
 紫陽花や色も足ぬ世の移り
 湯のいれに残る茶や秋のり
 あやういといふや礼者の身も慢
 五月もやましく巻て長き丸九子

花
 報
 分
 日
 由
 葉
 移
 日
 慢
 子

涼しき城志都くは川や水葉を
玉礎

雲日や松葉捨くは地の土あり
水礎

焚柱し葉小涼るや葉の雲
葉礎

やうくある月の雲井を村留り
松屋

青柳の風よおひきては雲
北女

葉抄小涼る

宗具のく法くはくちや千代の陰
雲志

寐時分の月秋よ来りて梅を
未城

夕涼を盃き流るはる川
雲巖

梅人の歌祝をむ初葉葉
一葉

梅ののくふも流るは小川
一立

袴のきり居りて足くは初袴
可芳

十足はくは流るは時留る
花羊

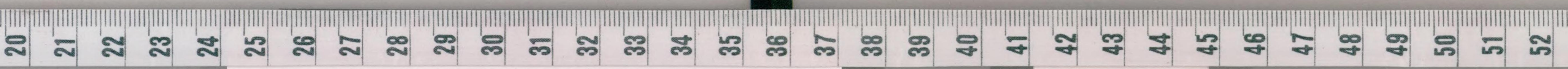
京もくも葉きく同くは梅の志
葉寸

荒破も波の花何り花の月
二笑

やうく種くは留るは煙乃葉
竹仙

為雲ををらふて涼くは月の
雀賦

夏川や青く流るは秋の明る
雀賦



掃てとも 振子柱を川 嘉小

雪耕

五月のや山のあちらの雲申し

巨方

おとよの暮もなき 振子柱や何

良甫

紙漉の里やあちこち 杜若

尋芳

朝顔の何変もく 咲き暮の先

魚角

木狭の序やけきの 初茄子

蓬山

春 影を子えく けて 雲の峰

路学

帝都への居れごと
清見のふたのゆき

雲雀さくたふくし ゆくた 時香

碧川

浄手洗ハ向やう へて かきつと

和甫

幣のそよよきめ うち 夏 山

古来

火繩振の出葉屋の 高き 起く 小

甫

壁のうらさきり ともや 初 秋

来

月代小名 穂をかしく 小 子

甫

唯のそよよき ね 葉 すす 庭

来

小倉より 振くし ち 俣 小 子

甫

るは津波の釜居のたり

子を携い流石。落日男ふ星

ころろの垢をたうに軽し

際のをふきうりと夢をふき拂ひ

握の大木を拙りきりうけ

海山を左右ふ足る月か限

たましくも乃低ふ飛（きり）

雫丸り宮りあうりも萩落

うらけく荷きは怪ふ莞ゆる

東

南

東

南

東

南

東

南

東

もすら酒不酔たる花りもる

俄り岩戸を掃寸離前

東

南

風流の志浅らぬ歳曉庵の老主こころ

強巡至企とち物ふ此きの祝哉明守軍

ころろを合を家業のむきを歌ひ予ら巻

あり古余りの月昇りもきり顔ききり

月や余字を移しけりこころ冷ふ振申を

きりこころの文集を居りてきりて

時自の也 猿丸のうけて 孝友あり

悟空

多額もせし 拵る 庭面習

素文

深系北 藤坊一竿 色染て

揚美

てきあり 別ふ 合ふ 酒の肴 合

素文

供そふ以 待く 去月の ぬり 上呈

文

風吹く 声の 音

美

菊ハまゝ 蒼三ツ 四ツ 咲おろ せ

文

茶 唇む 湯を 多き くら せし 趣

文

汁 飲ふ ところ へ 可 懐く せし

美

巻 巻ひ 手 巻 扇 争 不

空

拵 七 古 風 免 き する 心 拵 刺

文

拵 を 月 介 了 行 定 宿 の 拵

員

拵 子 戸 を 月 の 波 色 込 東 向

素

美 暮 重 なる 心 の 少 傳 心 する

文

拵 くら なる 也 襟 巻 も くら なる 程

員

珠 散 を 泣 する 家 手 号 せ

素

消息 小 一 心 なる 可 なる 也 屠

文

藪常のうらむと一き聲
産より晴をまじりて夕暮る
あまの火種を世風と世情やく
目隠しの晒落は何ぞの尻厚ん
うらむ乃た月并の紋
神擧代と強き神乃救
師立務乃人々起原
継足世はほろりと薫る振炭
道遠小舟のうけり舟

文 出 美 文 定 弟 文 出 美

小便をこらしてや川と立上り
東雲 赤小る乃ほのあま
月影は小るの普徳もあらう免
雞一本をまきまはつこ
弥敷の病を子を抱き逢惑は
破せり障子もまらき除喰
たくまき組まき何の水車
畑歩之ま 涙乃丹 津
下等北野小神文をまの 新

文 飛 員 文 空 天 文 吉 員

桜の位居も春

美

春風の桜の位居も春

花空

春の位居も春

春の位居も春

春の位居も春

春の位居も春

春の位居も春

春の位居も春

素文

春の位居も春

春の位居も春

春の位居も春

春の位居も春

一景

春の位居も春

除賀

春の位居も春

舞交

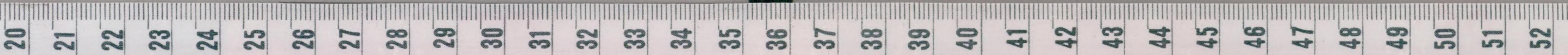
春の位居も春

菊居

春の位居も春

梅冷

七五七



春の子も花をむけける戸やうか

大正 甚 仙

白魚の落ふ揚らるゝ小海老や

葉 披

庭木の秋風男の子や土用干

とららるゝ巻きた葉の鳥の歌

研習海老の市ふ草知ら小春小

うららるゝ田の層層やゆりま

可 陸

皇太子の御也苗の柱あまの

清きく萩も秋の葉の歌

鳥の如く木の葉を雨に降す

鳴門越す鯛もあらるゝ春の月

晴 江

まてり日菊のりふ小春の

雪 実

籠の葉や雪をくまの葉の物

賦 巻

伏會や風ふきく秋実の全稿

柱 海

やうら場を築庭のりふほる物

枯 雪

ちるまのい末の舞くゝ帰る

遊 川

荏子や羽をうららるゝ立揃

三 柿

松林のち心きくゝ紅葉の

葉 堂

柳より出く落をぬるゝ門掃除

小 藁

機是摺記

蓬船下流須崎乗る事乃わりのに子あぬ丁三秋
九月あらず橋をくけふは初めの式をりふその橋の
歩行の足敷いひせり外は深乃高き事ハ船を
さらすは規とすは舟此より城機是削とす
字の何をもりて並ぶ事ハの事とすぬさぬさぬ
信とす六杯の通も是は乃と極し蓋より
吉く秋風ふちくくお祭とすは錦を織る
あやちの番ひのみちい績きしは信より

橋と道との事とすは志免はあく乃器
くは神代の天はくも橋は娘は星成や
かしたの橋の事ハ神はくもをほあし
一春乃三女史を撰は初めの式をりふその
あはく常とすはをわは橋原は男は橋かみ
あはく橋布の事ハ女ハ真桶はくはあはく
あはくこの橋は危きハ志は昇平の思はく
思ひ事ハ男くははくは彼の織ひの事

縁橋雲霞小啓て窓下くたり秋の夜かきたに
幾きの花の影は深人の葉のやいさふ千機の業談
あねあめ不降らむてきもくちなき然の男をた
かやした老を言ぬるを伴いりるくはし長き
とて身死てくさばさぬ

わらう初めは橋名を居る也石たき

松中 南草

旭さ付所の長き也釣巻の巻

無得

完りの巻陸を撰り折る那

業口

水瓶干抄さくくく定の入

五ツ中 米株

か稀々除衣ひまは在の森 是れ

吾川

元り也何かたしくむこのあつ話

小亭

門井戸を穿くくあ之をの鴉

彼之

喜楽く全踏くく不二の等

好文

あこりの色もわくねとを乃英

文河

軽くほを本意なきふの蓋うれ

化林

蒲公英也 草不薊尔 志

梅歌

翠の葉のひらふすけ 枝桂

雷ハ春おきむ 篠を風走ら

小菽川やひさやうと 鶯の聲

秋ハまこと 色丸きぬや かつて

子をゆく こと 枝の減る 踏くか

七夕や 煙ハ多き 川 初より

枝の聲のもしや 人 葉の静し

そ 柳の戸也 毛月亭 出守 静の前

遷佛のまゝあはれと やら 下 流て	こゝの 濁り 碎るまゝ 志し	掃きぬ 月 澄 後 了 仮住 居	こゝの 夢 蘇ふ 通る 旅 人	余は 心も 憂い 入 帆の 旅 人	架小 だの 松の 木 家	群 鳥の 宿 枝を 移す 木 家	文久 元年 十月 廿 日 静 賀
	来	賀	来	笑	古	来	静 賀

花より春のうらみ 渡来

高浪きの葉子の減りも 運来

管物とて、葉を東 祿来

葉より花に 枝より月すし

ちうくあけさる 鐘子の行列

蟹煮る 嗅よそあらし 燈来

涙うと 明石小言 寐て居る

貝糸のをきく 昔久ぬ村の長

うらみ 調ふ 四方乃 たる風

花をまの 此より 風 建より

花より 匂き 侍 常乃 来

隣より 流の水を 分て 来

り 花の 枝より 来

毛 種のを くに 徳田を 来

何の まるより 来

古を びて 来

葉 枝か びて 来

根 柱まて 来

賀

来

賀

来

賀

来

賀

来

賀

来

賀

来

賀

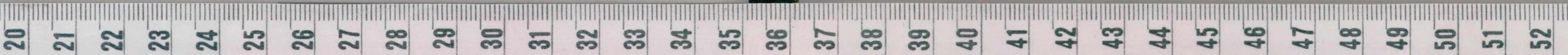
来

賀

来

賀

来



佐賀の桑 船安舟

賀

右の舟の折角ふらふ 糠や

来

月の星さし 徳利さし 好

賀

まゝ 阿る 存も 志の 飛やらん

来

小城のあゝの 縮み 芥さぬ

、

とや〜と子 佐のまゝ 角 柳

笑

鉛ま〜 星の 砂を 賣出す

毒

魚〜 ある 市代のもろ〜 のを 魚

賀

丘の 雲 雀の けり 過さぬ

来

うけろつや〜 くらも 冬 礎 徳

賀

いくら 歩け け〜 つきぬ 貝壳

来

この 桑乃 かさ ありや〜 梅 折

吉 来

深草の里さき

ちや あけろ 夜をいりま〜 蚊 赤

ね〜 いふ 舌き 影あり くら の 月

雌 鶉 ま〜 ありんて 高〜 雪の 山

30
八庫

消
863
163

14270

後りけ架 遠山又澄ら 雪少

辛未年安野庵
古
来

山水ありて草木を蒙り草亦あり
山の風景をくくはるる白松の葉
新月の如き露の珠ありけり
此際を写さんと文久二初冬 風聲の
後伴と系譜ありと全信



国立国会図書館 タイトル『後猿丸宮集』 請求記号 863-163

ガラス使用